

真の原因、又も蓋され、組織・資金の肥大で幕か。

日本の原子力界で次々と起きる出来事の真相を外国の読者にわかりやすく説明するのが、本誌A I Jの使命なのであるが、最近、到底満足してもらっていないケースが多いと危惧している。今回の刈羽（かりわ）村の住民投票結果は特にそうではないかと思う。もともと事件や事故というものには、各面・各層の要素・要因があるのが常であるが、今回の出来事でも、肝心な事は全く報道されていない。問題は、「安全」とか「安心」とか「政策」とかと言われ、その結果また組織の肥大を招き、時間と金とが注ぎ込まれて「一件落着」となるのは、眼にみえている。

しかし、原産が6月14日の総会で行った決議には、次のようにこの住民投票の真因を指摘している。

「軽水炉でのMOX燃料は世界で1960年代以降51基2,260本もの利用実績がありわが国でも・・・安全性には十分な実績がある。・・・こうした実績に対し理解が進んでいたにもかかわらず、住民投票で過半数が反対したのは、・・・原子力組織に対する信頼が回復してない故と認識する。・・・」

すなわち過半数が反対したのは、安全性の問題などではない。原産が分析した結果、反対1900人中多めにみても800人が安全性による反対、残りの1100人は「この際原子力体制側の猛省を求めるべき」として、品田村長に反旗を掲げた人々であった。安全性に反対の800人も、村内が混乱してからのち、ハイエナのように侵入した、反Puの煽動者の影響によるものが大部分といえる。（それまでこの村に対しては、この種の煽動は先ず効き目がなかったのである。）

瘡蓋（カサブタ）を破ったのは何か

前回の村長選挙は両候補とも原子力賛成だったが、接戦で、じつに熾烈な戦いだった。その結果品田氏が僅差で当選したが、しばらくの間「あの時誰がひどいやり方で運動した」とか「誰が、どの組織が本当に応援したか、或いは応援しなかったか」とか、「後ろ楯になった国会議員は（これは地元の人には一目瞭然）が打った手は」といった事々をめぐって、地縁・血縁のしがらみが因となり果となって、村の人々の心に多くの傷跡を残したのは、他の場合と同様であった。しかし品田村長の誠実な人柄で、その傷痕もようやく癒えていたところに、ここ2年近くの間の或る理由で瘡蓋が剥がれて、大勢が反MOXに豹変してしまったのがこの結果である。

柏崎・刈羽は世界最大の原子力発電所として脚光をあびている。地域の人々はその発展が原子力あつての結果であること、そして今後も立派に共存共栄できるという自信と誇りを持っていることは確かである。しかし一方で、全ての原子力発電所の建設が終了してしまったいま、電力会社の「態度」というものに対して、従来と違ったウエ

ットな気持で接することになる。日本では「釣れた魚に餌をやる人はいない」と言う言葉があるが、「まさか」と思いながらも、何かあった時「ヤハリ」となりうるのである。このような心ない言葉がなんどか聞かれたという噂も聞こえてくる。欧米と違って、誕生日にプレゼントだけでなく、朝夕「愛してるよ」と妻にキスする夫はむしろ珍しい日本であるが、原子力は何ととっても、日本人全てにとって、極めて微妙な深層心理に係わっているだけに、組織ぐるみの反省が必要だ。

さて、「或る理由」の最大の出来事は、前記の国会議員が昨年の総選挙で落選した事であろう。そのため、それまでとちがい、或るグループの人（それは原子力への賛否とは無関係）の声が大きくなるのは自然の成り行きであった。同時に英国B F N L社のデータ改竄問題等も原子力に対する「覚めた意見」を言いやすくしていた。

福島県のプル・サーマル差し止めが引き金に

そこに福島県知事の意見留保の騒ぎが持ち上がった。電力会社は自由化のもと、発電所計画の繰り延べを始めており、その一環として同県の火力（場合によっては原子力も）の建設繰り延べが、唐突に新聞に報道された。驚いた知事は、他県に先駆けてのMox燃料の原子力発電所への装荷に対する同意を撤回すると声明した。知事がそういう態度に豹変した理由は？これは前項に述べた事を繰り返す必要は無いであろう。もう一つ、推測として付け加えるなら、次回の知事選挙が近づいており、同知事が前回のときの出来事を「更めて」思い起こしたとしても、不思議ではない。そうすると、新潟県知事が「本県が最初の受入れ県となる事」に疑問を表明し・・・事態はあのようになり、展開してしまったのである。

原子力関係者が政府とともに、核燃料サイクルの重要性を訴え、地域の協力を取り戻そうと努力することは、やむをえない。しかしここに、敢えてえぐり出すように分析した「真因」を忘れては、同じ失敗を繰り返す恐れがあると思うのである。